

課題乗り越え 次の100年へ

秋田県立秋田高等学校同窓会の平成28年度通常総会は6月12日、秋田市の秋田ビューホテルを会場におよそ200人の会員が出席して開かれた。

創立から今年で101年を迎えた同窓会は、さらなる進化を目指す次の100年に向けて新たな歴史を刻み始めた。だが、その前途には少子化に伴う財政基盤対策など乗り越えなければならぬ課題も少なくない。

今年の総会の当番年次は昭和41年、42年、51年、52年、61年、62年、平成8年、9年であった。同窓会総会は基本的に当番年次が差配することになっており、今回はこれに企画委員会として昭和49年も加わり、受け付けをはじめ当日の細かい段取りや司会進行などを切り盛りした。

会議に先立って出席者全員が立ち上がり、まずこの1年間に亡くなった恩師や同窓会員の冥福を祈って黙祷、続いてCDの伴奏に合わせて校歌を1番から5番まで斉唱した。

最初に挨拶に立った町田会長は、昨年の総会で同窓会会則の目的に追加された「郷土の創生」に関連して、『文藝

春秋』6月号に掲載された対談の中で石破茂地方創生担当大臣（当時）が地方創生の鍵として挙げた「高齢者の町づくり」について言及した。この中で石破大臣は、人の人生は生まれ育った時代、広く学び知識を吸収した時代、社会で活躍した時代、そして老後の時代と大きく4つに区切られていて、特に平均寿命が伸びている今日では老後の時代をいかに充実させるかが地方創生の鍵を握っていると語ったとしたうえで、町田会長は次のように述べた。

「同じ秋田をふるさとし、同じ秋田高校で学び、社会人として活躍する間の一時的な空白はあるにせよ、定年を迎えて再び地域や職域のつながりを強める私どもの同窓会は、少子高齢化、人口減少の最先端を行くわがふるさと秋田の創生のためが一番いい足がかりになるのではないかと秋田復活のスタートをわが同窓会が口火を切りたい」

町田会長はこのように述べ、郷土秋田の創生、復活に強い意欲を示した。

続いて今春着任した安田浩幸校長（昭和54卒）が挨拶に立ち、本校の生徒たちは進路の実績、部活動の成

績とも素晴らしい結果を残しており、文武両道、自主自律の精神は先輩から後輩へと確実に受け継がれていると学校の現状を紹介した。そして今年2月、佐々木毅杯知の探究コンテストで上位入賞した生徒9人をタイの高校との国際交流に派遣できたことについて、「生徒たちはこれまで味わったことのない充実した体験をして帰ってきた。ご支援いただいた同窓会に改めてお礼申し上げたい」と感謝の言葉を述べた。

続いて議事に移り、初めに平成27年度の会務報告、5常置委員会、3特別委員会の事業報告を拍手で承認した。また平成27年度の一般会計決算のほか基金会計決算、教育基金会計決算について報告があり、収支ともに予算の執行は適正だったとする監査報告を受けて27年度決算は原案どおり認定された。



天上天下

TENJO TENGE

秋田市立秋田城跡歴史資料館が、場所を変え新装オープンした。先日訪れてみて、以前の資料館と比べて、格段に進化した印象を受けた▼以前から古代の東北地方の歴史に興味があった。蝦夷と言われる人たちは、主に東北の太平洋側在住の原住民で、秋田はそこは少し違う文化の領域であったと考えられる▼今も日本は、外交面では厳しい立場に立たされているが、奈良から平安時代においては、大陸の北方にあった渤海国との交易、交流は、中央政府が直接行うのではなく、出羽の国府秋田城が担うことになっていたようである▼外国の使節にはかなり気を遣い、史跡で今一番の売り気になっている「水洗厠舎跡」は使節のために造ったものであるらしい。当時の日本で、ここにしかなかった施設を造る技術を、秋田の人間が持っていたということに賞賛に値する▼今回展示品で注目したのは、紀年銘が書かれている木簡、戸籍類や書状などの漆紙文書、非鉄製の小札甲、和同開珎銀銭などの貴重な遺物だ。国府として機能していた時代の文化遺産は計り知れないものがある。秋田市の今後の発掘調査にさらに期待したい。